第1回　佐久市立中央図書館　建替再整備検討委員会　議事録

【日　時】令和5年1月17日（火）　13：30～15：30

【場　所】佐久市立中央図書館視聴覚室

【出席者】佐久市立中央図書館建替再整備検討委員7名

会　　長：植松貞夫

副会長：豊田高広

委　　員：森いづみ、森田秀之、柳澤拓道、小木田順子、篠原由美子

事務局7名（吉岡教育長、土屋社会教育部長、高橋事務長、依田館長、市川係長、高瀬専門員、竹内主任）

【資　料】会議次第

・資料1　　佐久市立中央図書館建替再整備検討委員会委員名簿
・資料2　　佐久市立中央図書館建替再整備について
・資料2－2　現在、図書館職員が考えている理念・コンセプト等の素案
・資料3　　市民アンケート調査結果（主な意見）
・資料3－2　調査結果（追加資料）
・資料4　　第1回佐久市立中央図書館建替再整備ワークショップ開催報告書
・資料4－2　佐久市立中央図書館建替再整備ワークショップについて（概要）
・資料5　　佐久市立図書館条例
・資料6　　佐久市立中央図書館建替再整備検討委員会設置要領

【会議概要】

委嘱書交付式

1　開会
2　教育長あいさつ
3　自己紹介
4　委員の任務及び任期等の確認について
　（会議資料のとおり）
5　会長及び副会長選出
　会　　長　　植松委員に決定　（推薦により全員同意）
　副会長　　豊田委員に決定　（推薦により全員同意）

６　会議事項　（1）中央図書館の現状について

それでは次に会議事項となりますが、委員会設置要領によりまして植松会長に議長をお願いしたいと思います。

（植松会長）

それでは会議事項に入りたいと思います。会議次第をご覧いただきまして6番でございます。時間は予定より13分程早いですが(1)の中央図書館の現状について事務局から資料に基づきご説明をお願いします。

（高橋事務長）

中央図書館の現状についてご説明申し上げます。あらかじめ郵送をさせていただきました資料になりますが、資料の2をご覧ください。それでは主な点についてご説明させていただきます。1の佐久市立図書館(1)の施設概要でございますが、この表の中の一番上の中央図書館について、現在建替再整備を進めているものでございます。また市内には他に4館の図書館がございます。中込駅前の複合施設の中に比較的小さなサングリモ図書館というものがある他、合併前の旧臼田町、旧浅科村、旧望月町地区にそれぞれ図書館がございます。また一番下の丸印の草笛号の概要とありますが、マイクロバスの移動図書館が1台あります。5館全部では延べ面積で4700平米ほどになりますがこのうち中央図書館が1640平米ほどになります。

次に2ページをご覧ください。(3)の利用状況ですが、5館全体では約年間23万2000人の利用があります。このうち中央図書館は約15万3000人となっております。また、蔵書数につきましてはこの資料にお示しさせていただいておりませんが、5館全体では約45万7000冊ございます。このうち中央図書館には約21万冊の蔵書がございます。

次に3ページをご覧ください。下段の「2個別施設計画について」ですが、この計画は当市における上位計画をもとに策定しました施設ごとの具体的な方針となります。

具体的な対策内容は太字で書いてある部分になりますが、躯体の劣化が顕著なことから、法定耐用年数47年を経過する令和8年度までを目途に、施設の建て替えを行う。また、他の施設との複合化も視野に入れ検討するとし、この計画に基づきまして、現在の建替え整備を進めているところでございます。概要については以上でございます。

（植松会長）

ただいまご説明いただきました中央図書館の現状についてでございますが、ご質問がありましたら挙手をお願いします。どうでしょうか。何かありますでしょうか。これはこの建物自体の劣化が顕著だということですが、いわゆる耐震診断っていうのは行っておられる。

（依田館長）
　ないです。2階建てということで法的なものの枠外という事でされてきませんでした。
（植松会長）
　そうですか。この辺は大きな地震は予想されていないのでしょうか
（土屋部長）
　この辺は活断層が見当たっていない地区になりまして、非常に地震が少ない地区です。
（植松会長）
　この総合管理計画だと建て替えの場合には床面積の上限値とかは設定されているんですか。
（土屋部長）
　他の建物については設定されているのですが、図書館については市民説明会等を踏まえてプラスアルファということで表記されております。複合を視野に入れながら図書館の現状では少し足りないだろうという庁内合意を得ておりますので、それについては今後検討して必要な施設を検討していくというところです。
（植松委員）
　複合化の場合には専有面積と共有というのがあると思いますが、専有面積自体がこの1640㎡より大きくなってもそれはあり得るのですか。
（土屋部長）
　そのように合意を得ております。
（植松会長）
　いわゆる蔵書規模的には何か目安的なものはありますか。
（依田館長）
　今のところありません。
（植松会長）
　そういうことでありますので、あまり建物の大枠として制約がないという、ある程度自由に膨らませて議論することができる。
（土屋部長）
　必要な施設を整備しましょうということですので。
（植松会長）
　公共施設総合管理計画というのは総務省が3年ほど前に全国の自治体にその策定を要請しました。それぞれ自治体で公共施設とかインフラの今後をどうするかという計画を立てなさい、というものです。全体として日本の公共インフラは高度成長期の1970年代に一斉に作られて、現在50歳ぐらいになっていまして、一斉に修理をしなくちゃいけない。上下水道から道路、橋、トンネル、学校、病院、庁舎まで全部です。そういうことで現在50歳ぐらいのものを一斉に建て替えなくちゃいけない、修理しなくちゃいけないとなるとそんなにお金ないでしょう。少子高齢化で年金の問題とかもあるから、

これからどんどん実際収入が低くなる。そして支出もきつくなる中でこの公共インフラをどうやって管理運営していくかというのを立てなさいというのが総合管理計画。図書館は小さくしていくという計画の立て方をしている自治体が多いですが、こちらの場合には皆さんのご理解があってもうちょっと大きくてもいいのではという事であります。よろしいでしょうか。他に何か。

（豊田副会長）

複合化というのは具体的にここが今有力な候補というのはあるんですか。もしかするとあとのワークショップの話で出てくるのかもしれないですが、あれば。

（高橋事務長）

具体的なところというのは今現在もないのですが、個別施設計画はそれぞれの施設で作っています。美術館においても複合というのは一つの検討材料としております。あとはそのまた向こうに文化財事務所というのがあります。それから少し離れたところに臼田文化センターもあります。そういった社会教育部の中での施設になるのですが一部廃止というような計画もしています。そういったところと例えば複合化が進むとすると両方の面積の、先ほどのプラスアルファという面積の話がありましたが、うまく複合化もしながら、佐久市全体での面積を減らしていき、こんな考え方の中でどこと複合すればいいのか、あるいは出来るかといったところも担当課と今後話を詰めていかなければならない部分だと、こんな状況になっています。

（豊田副会長）

そうすると公共施設等総合管理計画においてどういうふうに施設を集約していくのかっていった時にも、ある意味全ての公共施設が可能であれば複合というような選択肢としてはあるという状況という理解でいいですか。

（土屋部長）

補足しますと、美術館もやはり同じ頃の建築物になります。当初リノベーションということで改修を目的にしていたのですが、視野には入れていくべきじゃないかということでございます。今、駒場公園内の一番大きな建物で県の施設でありますけれども、佐久創造館が閉鎖をしていくというそこはある程度方針が出ているというところであります。

（豊田副会長）

あともう一つ複合の話が出たので合わせてお聞きしたいんですけど、最近市街地再開発なんかの関係で商業施設と一緒になっていくのは他の自治体でよくあると思うんですけど、こういったところは何か考えておられるんでしょうか。あるいは駅舎と一緒にするというのもありますけれども。

（土屋部長）

今のところ商業施設では特に一緒になりたいというのが、最近ですと農協の金融が多いのですが、今のところはこの図書館についてはございません。アンケートではやっぱりカフェとかそういった意見は多く出てはいるのですけれども、やはりそういったものも今後検討していかなくてはならないというふうに思っております。

（豊田副会長）
　検討の対象にはなるという理解でよろしいでしょうか。
（植松会長）
　いかがでしょうか。どうぞ。
（柳澤委員）
　図書館の場所についてなんですけども、実際住んでみて駒場公園のあたりは車がない限り来れない場所で、学生さんとか車がない人は来にくいだろうなと感じていて、そもそもこの場所に建てられた経緯と、今後建て替えによってどういうふうな考え方で現地なのか、あと別の場所なのかっていうのはどう考えられているんでしょうか。
（土屋部長）
　駒場公園というのは県が市の集積ということで整備しております。その中に美術館、図書館というふうに当初配置されてきました。その中で市としては、駒場公園内で建て替え、それか現地建て替えというのはまだ決めておりません。当然いろんな条件下で建て替えとかしていくべきで、ですから他の土地を買ってというところはちょっと今無理だろうというところで、この駒場公園内での利用の中では、交通の面、デマンド交通とか今始まっておりますけれども、そういった交通の利用者については北中込駅からの利用の便の対策をしていくということも視野に入れて考えていかなければならないです。
（柳澤委員）
　基本的には、敷地内での建替え、現地かどうかは別として。
（植松会長）
　よろしいですか。どうぞ
（豊田副会長）
　今日天気がいいので北中込駅から歩いてきたんですけど、雪の日とかはちょっと無理という感じなんですね。
（土屋部長）
　雪もあまり多くは降らないですけど、むしろ氷になってしまう。雪はほとんど年間積雪しても5センチ程度、たまに大きく降ることはございますけれども基本的には降らない。そう考えるとちょっと寒さですね、マイナス10度もありますので、外を歩いて来るにはかなりきついというのはあります。
（柳澤委員）
　入館者数について年代別の内訳というか、どれぐらいの年代の方がどれぐらいの割合で来ているか気になっていて、今の交通の便の話にもリンクするかと思いますが。
（森委員）
　資料3には30代から40代が多いと出てますよね。
（柳澤委員）
　傾向としては

（豊田副会長）
　貸出ベースなんですかね。貸出でいうと30代40代が多いという事なんですかね。
（依田館長）
　はい。小さいお子さんたちを連れて来る保護者の方が多いので、館内で見ているとこの図書館が高齢者に優しい図書館という感じで滞在されている方が多いんですけれども、基本的な部分では、私たちも意外だったのですが、デジとしょの利用もやっぱり合わせてもちろんM字カーブといわれるけれど若干違う部分があります。佐久市ではもう生まれてから車は足のように思っています。佐久市は移住にも視野に入れているのでそういう視点からも検討する余地がある、そういう意味でどんどん意見を出して頂きたいと思います。
（豊田副会長）
　私静岡の人間なんですが、静岡だともう自転車を使うのが当たり前なんだけれど、基本的にそれはあり得ないという理解でいいですかね。自転車を使える地域では中学生高校生ぐらいには非常に有力な交通手段になる、それはあまり利用としては考えにくいという状況なんですか。通学に何を使ってるのか。
（依田館長）
　基本的に小中は歩いております。私は、中高は自転車通学でした。この頃子どもたちは親を足のように使う、これから市内の高校2校が統合するのですが、保護者からの要望は駅から近い所、送迎が楽なようにという希望が出ています。ただなかなかそうはいかない部分がありますので、子どもたちは自転車をもっている子は自転車で通っています。ただ生活自体は小学校中学校で雨が降ったりすると学校の周りは、ここは都会かしらぐらい車が並ぶのが現状です。一家に四台とか持っているそういう地域です。そういうことを頭に入れておきながら話ができたらいいなと思いますし、でもやはり車がなくても、これから高齢化社会なので、行きやすい方法はないだろうかと考えております。
（植松会長）
　いわゆるコミュニティーバスみたいなのはないですか
（土屋部長）
　そうですね。デマンド交通ということで以前よりもだいぶ改善がされて利用者も伸びて来ておりますので、それで200円で高齢者の方が一時間前に予約をすればAIで全部配車してくれる、それが大分利用は伸びています。
（高橋事務長）
　自転車の利用は、この図書館前にも駐輪場がありますが、暖かい日は自転車がいっぱいになります。地域の成り立ちが、村がたくさんあってその村と村の距離があるのです。だからこの旧佐久を取っても、隣の岩村田地区とか、あと中込地区と野沢地区と分かれています。なので、隣のその集落までぐらいだったら自転車の移動は可能なのでしょうけど、それ以上になってしまうと谷があり山がありでちょっと厳しいのかなと思っています。

（植松会長）
　ありがとうございます。

6　会議事項　(2)市民アンケート結果について
（植松会長）
予定の時間になりましたので続きまして2番目。これも事務局から説明を頂きます。
（市川係長）
　市民アンケート結果について、ご説明申し上げます。アンケートの結果につきましてはあらかじめ資料3として主な意見をまとめた資料を郵送させていただいておりますが、今回はもう少し詳しい内容を説明申し上げたいと思いますので、本日お配りしました追加の資料3-2をご覧ください。調査結果は問5から始まっておりますが問4までは住所・男女別等の基礎情報となっておりますので、省略させていただいております。問5の図書館の広さについてと、問6の図書館を1年間どの程度利用しているかでございますが、考察の方になりますが図書館をほとんど利用していない対象者約6割。少し狭いと感じている方が3分の1を占めておりまして、各コーナーの拡大が必要と考えられます。次に問7と問8でございますが、図書館を利用している方に回答いただいた滞在時間と利用方法になります。滞在時間では30分から1時間程度の利用者が多く、本を借りる・返すといった従来と変わらぬ利用をしている方が多く、今後は、長時間利用しやすい館内環境整備や、現在の図書館に求められる居場所、くつろげる環境整備に配慮する必要があると思われます。次のページをご覧いただきたいと思います。問9から問11までは図書館に充実させてほしいものとして、スペース、サービス、図書分野についての質問でございます。問9の充実させてほしいスペースでは、ゆっくり読書する、のんびり休憩する、またタブレット利用スペースの拡大など、現代の図書館機能が求められています。問10の充実させてほしいサービスでは図書館本来の機能のほかに、中古本の回収やインターネット利用等のサービス拡大が求められています。問11の充実させてほしい分野では、文学のほか以下のとおりでございます。問12のであれば良いと思うものでは、飲食等の場、市民交流の場、など新たな空間や、郷土・文化資料などの公開が求められていることから、図書館全体のスペース拡大が必要と考えられます。
　次のページの問13は、建替再整備について自由記載で回答いただきました、こちらにつきましては、グラフの高いところで6番の安心、落ち着く空間、7番の多目的、誰でも使える場など新たなサービスや利用のしやすさ、立ち寄りやすさなど求める意見が多く、サービスへの更なる工夫や施設の構造などへの期待がうかがえます。また意外だったのが、13番目の紙媒体は重要であるといった意見が多かったことです。説明は以上です。
（植松会長）
　質問がありましたらお願いいたします。どうぞ。
（森委員）

アンケートそのものについてちょっと概要をご説明頂きたいんですが、今の3ページのところで有効回収数477というのが分かりました。それから資料3-2-1、1枚目に図書館をほとんど利用しない対象者が約6割含まれるということですので、来られた方にアンケートしたわけではないって事ですよね。そのあたりはアンケートの概要をちょっとご説明頂ければと思うのですが。どんな対象に対してどんな方法でやったのでしょうか。

（高橋事務長）

方法につきましては無作為に1000名を抽出し、なおかつ15歳以上、それから70歳以下の方に対して、年代別に同人数になるように抽出をしてお願いをしています。アンケートの質問の内容につきましては、この問5から問13まである、ここに書いてあるそのものが質問内容になっております。

（植松会長）

郵送ですか。

（高橋事務長）

郵送です。

（植松会長）

何人送って何人ぐらい返ってきたか。

（高橋事務長）

1000人に送って、約480名の回答がありました。

（森委員）

依頼の時は各年代均一になるように出されたと思うんですけど、回答は年代ごとのばらつきはありましたか。

（市川係長）

こちら有効回答の内訳となりますけれども、全体100%とした中で10代が約5%、20代が8%、30代が12%、40代が15%、50代が17%、60代が21%、70歳以上というくくりがございましてそちらが21%、そのようになっております。

（森委員）

はい。つまり大雑把に言ってですね、若い世代の方よりも上の世代の方からの回答なんだよっていうことですね。ありがとうございます。

あとは残念ながら半分は無関心層みたいなところもあるということですね。若い世代の方の回答内容はわかりますか。

（高橋事務長）

分析の中ではクロス集計しておりますので、20代30代の方の回答を見ることは可能です。

（森委員）

後ほどご提供いただければ。

（柳澤委員）
　実施時期はコロナが始まってからですか。
（依田館長）
　そうです
（豊田副会長）
　この間送っていただいた方の資料2の4ページにあるのは、概要ということですねアンケートの。
（係長）
　はい。
（植松会長）
　他にはいかがでしょうか。利用状況として、平日と休日ではどんな具合なんですか。
（高橋事務長）
　はい。平日は大体500人前後ぐらいです。土日になりますと、1000人を超えてくる日があります。
（植松会長）
　他にはいかがでしょうか。どうぞ。
（小木田委員）
　これは先生方に、ご専門の方にお聞きしたいのですが、アンケートでお答えくださった方の図書館をほとんど利用していない対象者が6割となっているのですが、一般的に人口の中で図書館を日常的に使っている層は大体どのくらい、というものはあるのでしょうか、相場みたいなもので。
（森田委員）
　2割ですね。大都市になると1％とかも。
（植松会長）
　一般的には常連とされる人は10%いかない程度っていう感じですね。
（豊田副会長）
　貸出ベースで考えると大体2割ぐらい、2割来れば結構多い感じですね。でも来館っていうこととなるともっとたくさん見える、図書館によっても違うんですけれども、貸出ししか来なくていいかというくくりの図書館もありますが、半分ぐらい来れば本当によく使われているというふうにしてもいいのかなとは思います。
（植松会長）
　貸出カードを持ってる人の比率を一つのメジャーにする考え方があるんですが、日本では貸出カードを毎年更新してないところが多いので、もう実は引っ越しちゃった人もまだこの図書館の貸出カードを持ってる人みたいになっている。ヨーロッパでは貸出用カードは毎年お金を払ってもらわないといけないので、どのぐらいの人がカードを持っているか正確に計れるが、日本ではそれができない。他にはいかがでしょうか。

6　会議事項　(3)ワークショップの結果について

（植松会長）

　それでは次に(3)です。ワークショップの結果についてご説明をお願いします。

（市川係長）

　追加の資料4-2をご覧ください。ワークショップの概要につきましてはあらかじめお送りしました資料4の方で示してございますが、それらをまとめて考察を加えましたこちらの資料の方でご説明を申し上げます。ワークショップにつきましては各回それぞれのテーマに沿って、4回実施しました。1回目中央図書館の課題について考えようでは設備面の老朽化、各スペースの狭さや不足など施設面の課題、図書館からの情報発信やレファレンス機能の充実などソフト面の課題が挙げられました。2回目でございますけれども、新たな中央図書館の機能について、3回目では、複合施設の機能について、カフェ、イベントスペースなどの現在の中央図書館にはない新たな機能の他全てのスペースの拡大が必要だという要望があげられ、複合施設と会議室、トイレ等を共有することにより管理費が削減できるといった声もあり、様々な複合施設の相手先もあげられました。4回目の新たな中央図書館についてのまとめでは、3回目までのワークを踏まえまして意見をまとめ、新たな図書館には、ゆったりくつろげるスペースまた必要な情報収集活用ができる場、スペースの充実や、施設の複合化が求められていることがわかりました。これらの結果を考察いたしますと、市民の様々なニーズに応じるためのスペースや機能の拡充や、課題解決のための図書館からの積極的な情報発信や、人と人が交流し学び育てる場としての役割が求められていると考えております。説明は以上でございます。

（植松会長）

　これにつきまして資料4と資料4-2になりますがいかがでしょうか？どうぞ。

（篠原委員）

　このワークショップには、私が一緒におたよりを作っているボランティアのメンバーも加わっています。報告書の中身を読んでみると、かなり順当な内容で、図書館関係者としては、これありだよねという感じのものになっている。でも逆にいうと、図書館にこだわりのある人たち以外の人たちの図書館に対する想いがすくい上げられていないのではないか、という心配があります。そのあたりの分析はどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

（依田館長）

　実はワークショップを4回運営しながら同じようなことを考えていました。私達図書館に勤める職員が考えているこれからの図書館とあまりずれない、そういう意見があってある意味順当だなと思っています。利用しない皆さん6割の気持ちをどうくみ取るかがとても大事な点になるかなと思っています。声にならない声というのも変ですけれど、なかなか図書館を利用できない人、アンケートに答えてこなかった人たち、この数字だけではないところでもう一回考えてみる必要があるのではないか、そういう視点についてもまたここでご意見頂ければと思っています。そうしないとこれからちょっと先へ行く図書館、そのように考えた時に今まで通りの図書館のような形になってしまって、佐久市が抱えている

色々な課題があるにもかかわらず、今までの図書館と同じだとちょっと寂しいというか、ちょっと期待していたのに、というような声になりかねないなと思っています。具体的なお答えにならなくて大変申し訳ないですが、やはりその辺を危惧しているところです。

（植松会長）

何か例えばこれは記録しなかったけれど、こういう面白い発言があったとかっていうのはありますか。印象に残るような。

（依田館長）

印象に残るというよりか、図書館はやっぱり本を貸し出せばいいよねという意見を、最初何人かの方はそういうふうに思っておられました。図書館に関心があるというより図書館で何かあるみたいだからちょっと来てみたよという声があって、佐久市としては図書館の可能性という事が佐久市の皆さんにとっては、本を貸出す場所という認識が強いのだということを改めて感じました。やっていくうちには、そういうことも出来るのか図書館は、という新たな認識の中で、最終的には図書館に関わっている皆さんの声に感化された、そんな流れだったかと。

（植松会長）

他には、どうぞ。

（森委員）

今のようなことを考える大前提として、ワークショップそのものの概要といいますか、どういう考え方でワークショップをやるというお声掛けをして、どんな手段で人が集まってきて、基本的に同じ人たちが4回重ねてきたのか、そのあたりの事を伺いたいです。それに加えて、もしかしたらまた後で取り上げられるのかもしれないですけれども、追加資料2-2について今のところ言及がなかったのですが、これがまさに図書館の職員の皆さんの考えだと思うんですね。こちらのものがどの程度ワークショップの参加者の方に伝わっていたのか、いなかったのか。私もざっと読ませて頂いて本当に想定の範囲内、すごく妥当なラインのご意見が出てきて実現可能性の高そうなものが比較的多かったんです。そのあたりがワークショップの参加者にどんなふうに伝わっていったのかお聞きできればと思います。まずどんなふうに募集されたのか。

（依田館長）

公募という形で集まって頂きました。4回とも同じメンバーで今回は行いました。ただ途中で参加したいという方は拒まずに入って頂きました。基本的にはグループ内討議という事で、私の方でファシリテーター的な事をさせて頂きながら4回を行いました。エンドレス的なものも思っていた時期もあるのですが、検討委員会の皆様にある程度ワークショップの内容をお伝えする事もあって、4回で区切りをつけ、同じ皆さんでしたので皆さんの中で今考えている図書館は･･･という形の流れを私の方で4回の柱をたてました。これは実は先ほど話題になった住民説明会の中で皆さんから頂いた意見の中にもあって柱にしました。3年越しの住民の皆さんのご意見を選別したものです。

（高橋事務長）
　追加資料の4-2のところにも書いてあるのですが、昨年度20人を応募しました。20人の皆さんを4グループに分けて5人ずつの小グループを作って去年の9月から12月までの間に4回、今館長申し上げた通り同じメンバーで実施をしております。そのワークショップで何をやってもらうかという事ですが、ここまでの説明でもありました通り、場所と大きさについてはまだ未確定な部分がありましたので、それ以外の部分についてあらかじめ4つのテーマに沿ってやりますよということで、課題について、機能について、複合化についてなど4つのテーマであらかじめ皆さんにお考えを持って集まってもらった。そんな形でやっております。
（森委員）
　集まられメンバーの方の年代はざくっとどんな顔ぶれでしたでしょうか。
（高橋事務長）
　20代2人ぐらい、30代、40代どちらかというと60代、やはり先ほどのアンケートじゃないですけど、60代の方が一番多く集まりました。
（森委員）
　でもその割にはやっぱり子育て世代の事を考えてあったりとか本当にいいご意見がたくさん出てますね。
（植松会長）
　他にはいかがでしょう。
（土屋部長）
　ひとつよろしいでしょうか。
（植松会長）
　どうぞ。
（土屋部長）
　市としましては、これから段々色々詰めていく段階で、各段階、どの段階かはっきりしませんけれども、ワークショップそれから市民説明会、そういった市民の意見を頂ける場というのは、やはり固まる前に作っていくという論法・手法で、市全体で取り組んでおりますので、ここで揉んで頂いてまた戻す、また市民の意見をもらって取り出すというような、そういう事を考えております。
（植松会長）
　どうぞ。
（森田委員）
　進め方の話をします。市民の意見を聞くというのはとても大事なんですけど従来の図書館のイメージだったり、従来の公共施設のイメージというのがそのままの状態で色々意見を聞くとですね、その延長線上でしか物事が考えにくい。私はそういう意味ではワークショップとか慎重にやってくださいといつもお話をします。例えば今厚木市さん、下田市さんの新しい図書館などの支援をしていますけれど

も、そこではいきなり1回目で映画を観て頂く、その映画を観た感想を語り合う。実はその映画は下田だったら『くじらびと』という海を背景にして暮らしている人の物語ですけど、そういうのを観てもらって語る。そのうち下田市の未来を語る。実は事前に図書館員の方に観てもらっていて、その映画に対しての様々な周囲の関係しそうな本を部屋の隅に並べておいてもらって、休憩中にそれをぱらぱらと見て、さらに議論が深まっている。実はこの今の場こそがこれから目指そうとしている新しい図書館の一例なんですよ、という話をするとえーってなる。図書館の話をしに来たのに映画を見せられ、本があってという事で、実はこれこそが図書館の新しい姿の一つなんですよ、もっと皆さん色々なアイディアを飛ばして頂いて構いませんっていう話をする。本当に新しいものを作ろうとしているんだったら、進め方自体を変えないと。それが『The 図書館』でいいですということであればいいが、それぐらいしないと知の拠点みたいな変なフレーズがついちゃうんですよ。知の拠点というのは僕大嫌い。知というのは現場にあるんです。病院だったり畑であったり山だったり。それをインデックスとして持ってるのが図書館。僕も図書館に関わる身として知の拠点なんておこがましいわけです。そんな話をしていかないといけない。もっと言うと移住してから16年ですけれど、やっぱり長野県非常に素晴らしいなと思うのは公民館です。公民館というのは自分たち住民が運営する活動の場です。お役所は場だけを支援しているだけであって、運営してるのは自治組織。役所は場をつくるという考え方を図書館にも是非入れていったらいいと思う。ですからちょっと言うと、活動の拠点になるということ。知の拠点じゃない。活動が起こる、そういうような進め方をしなきゃいけないと思っているのですが、アンケートとかですね、この課題について考えよといったら、もうここになっちゃうんですよ。そういうふうに進めないといけないと思いました。

6 会議事項 (4)新図書館の在り方について

(植松会長)

時間の問題もありますので次に(4)新図書館のあり方について、まず事務局からご説明していただきます。

(依田館長)

今森田委員からお話がありましたが、その後にご説明するのは心苦しいところですが、お聞きいただければと思います。

本日配布しました追加資料からご説明する前に、この中央図書館の立ち上がりの所から、概要をご説明させていただきます。1979年、40年近く前に、文科省が図書館の補助金を増額する、それに相まって、佐久市民の皆さんからもたくさんの要望、署名活動で図書館はできあがりました。ついては、中央図書館というように考えていたのですが、図書館協会の皆さんから、これから発展する佐久市にとっては、地域図書館の位置付けがふさわしいというような資料が残っています。そのようにして開館しました。20年ほどたった1997年には、インターネットの活用というなかで、本の貸出だけでなく情報を提供するという市の願いのもと、子どもたちの遊ぶ場所をつくり、AVコーナーをつくり、パソコン

ができる場所を作りました。この視聴覚室では、夏には映写会が開かれました。それから18年ほど後2005年に、臼田町、浅科村、望月町、旧佐久市の4市町村が合併しました。市や村にあった図書館をそのまま残して、中学校区に1つの図書館というような理想的な配置となっています。この図書館は中央館としての機能を持たせた中央図書館として事務局が置かれ、他は地域館として位置づけられました。中込と言う場所に図書館はありませんでしたので、分館としてサングリモ図書館となっています。もともと公民館図書館から出発した図書館なので、移動図書館はそのままで、分館を含めると5つの図書館があるということになります。佐久市の図書館は中央図書館の機能を持った運営ですが、合併してから17年、いつの間にか、最先端の情報化、すごいデジタル化の波からは遅れております。これからの情報化の波に乗る、情報センターの機能をつけ足していくには、この館の良さもいっぱいあるのですが、新しい考え方をつけて、新しい図書館にしたいと考えてコンセプト等のをつくっております。これは、あくまでもたたき台のたたき台としてこんなふうに考えましたということで、まず資料2-2の1ページ目、現在図書館職員が考えている理念・コンセプトですが、図書館は、市民が生涯を通じて健康で生きがいのある人生を過ごし自己実現をはかれるようなお手伝いをすること、それから、多様化する利用者ニーズに応えるように単に本を借りるほか、様々な情報など役割が果たせたらいいなということで、必要な情報や学習機会、新たな興味がみつかり、学習や自己実現をはかることで人が育ち、人と人が交流することで新たな世界がひろがる図書館を目指して、みつける、そだてる、ひろがる図書館ということを考えております。それを具体的に目指す姿として6本の目指す姿ということを示しております。その6つについて、ご説明したいと思います。

2ページ、新施設の特徴について今図書館は六つの柱を立てていますがこの6つについてもご意見をいただきたいと思いますが、たくさんの情報に出会える場とりますが、冊子体はとても大事だと思っています。アンケートの中の年齢の方っていうお話もありましたが、それも情報選択肢の機能としてきちんと残したいなと思っております。

2つ目は、佐久市の地域情報、歴史的な情報、佐久地方の中核の図書館、これから少子化を迎える中で、そこの部分は大事にしておきたいと思っています。こういうものを大事にしながら育てたい、どういう図書館でありたいかというと、やはり、次世代を担う人づくりのできる場、これは生涯にわたる読書の体験につながるので、すごく大事にしたい。遊ぶこと、学ぶこと、そういう環境を大事にしたい。それから子どもだけでなくて、私たちのような学校を離れた年代にとっても、常に学ぶ場、出会える場、情報に触れる場そういうものを考えて4つ目の柱としました。点で終わる図書館ではなくて、それぞれが出会ったり学んだりしたものが、人と人が繋がりあって新たな活力、輪が生まれたり、そんな場でありたい。そのためには、6番、居心地良くゆったりくつろげる場、そんな空間が図書館には必要なのではないかなと、考えております。ちょっと戻りますが2ページ目、新図書館のコンセプトでありますが、これは先に図書館のスペースがあって環状的なの情報みたいなところを作ってありますけれども、私は、図書館はこれがもっと複合的に見つけるものが、そして人が、社会が育つそしてそれが広がっていく。そういう図書館で醸成された場でありたい、いろいろな活動は現場にあるというお話がありましたが、

その通りそのお手伝いをできる図書館にしたい、最終的には見つけるではなくて見つかって育って広がっていく。居心地のいいワクワクするような図書館を作りたいと職員は考えています。ということでこの委員会には図書館の建築それから運営、県内の図書館情勢を知っている、出版者、支えてくださる図書館の利用者、移住や子育て世代の皆さん、本当にそれぞれのエキスパートの皆さん、ぜひ私達の方ワクワクするような図書館作りに忌憚のないご意見をいただければ幸いです。6項目に限らず、私たちが気づいていない落ちている部分があるのではと思いますが、教えていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

（植松会長）

今ご説明頂きましたが、まず最初に質問しておきたいという事があれば。どうぞ。

（森委員）

さっきの質問とも重なりますが、タイミング的にこの職員の皆さんのコンセプトというのが、いろんな方を公募してワークショップを重ねてきたのと時間的にどういう関係性にあったのか、つまりもうあるべき姿というのが結構はっきりされていて、それに沿うような形でワークショップがなされたのか、逆にワークショップでコミュニティとしての方向性が出てきたから、職員の皆さんはこういうコンセプトを作られたのか、そのあたりを教えて頂けますでしょうか。

（依田館長）

一昨年に図書館の公共施設の中の再整備という事で、個別施設計画を作るにあたって図書館の職員で話してきました。実は個別施設計画では一斉に2割減という事が示されていました。その中でどういう図書館が出来るのだろうか話をし始めていました。なかなか職員の意見がまとまるところにはいかず、どんなことを考えているかという事を図書整理が終わった後集まって何回か話してきました。2割減の案を市民の皆さんにお話した時に、市民の皆様の方から今だって広くないのにどういうことなのかという事で、昨年度市民の皆さんのご意見、強い後押しがあってそういうふうになりました。そういう中で私たちは、せっかく縁あってここにいる者なのでほとんど並行して話を進めています。話しているうちにお互いが重なってしまうというか、それは良かったのか悪かったのかそんなような気がします。

（植松会長）

他にはいかがですか。ということで、まずこの6本の目指す姿というのを今事務局、図書館の方としては考えていらっしゃるという事でありますが、ぱっと拝見するためにこれに付け足していく、直ちに思いつかないかと思いますが、例えばたくさんの情報に出会える場というのを私の立場から言うと･･･というふうな事で1-1、1-2、1-3みたいにどんどん新しい事をつけていくというのもありましょうし、というような事で皆さんのご意見を色々出して頂きたいというのがこの委員会の進め方かなと思っております。そういうもののバックグラウンド、ベースの話をもうちょっとやった方がいいかなと思うのですが。この佐久市の歴史文化に出会えるということでいうと、現在のこの図書館はいわゆる郷土資料というものについて誇れる内容であったり、量を持っていらっしゃるのですか。

（依田館長）

誇れる量かといわれると自信がありませんけれども、ここにしかないちなみに信濃佐久新聞であったり、佐久の先人ということで全国には知られていないのですけどそれぞれ佐久をつくってきた皆さんの資料があります。このことについては今のうちにきちんと保存をし、データ化し、そしてその先の構想としては皆さんに知ってもらう、教育現場でも教材化して使っていく、そんな構想を思っております。

（植松会長）

長野県ではデジタル化を県が助けてくださるということですか。

（森委員）

アーカイブ用のサーバーを独自に立てなくても大丈夫です。ここに置いてください。こんなように活用できますという形でサポートしています。

（依田館長）

その準備をしています。

（植松会長）

その郷土資料のデジタル化は佐久の方で自分のお金でやってね、ということですか。

（森委員）

そうですね。デジタル化そのものについては、県のほうで計画はありません。

（豊田副会長）

話前後しちゃって申し訳ないんですけどちょっとフレームで気になる事があったんで、いいですか。

（植松会長）

どうぞ。

（豊田副会長）

先ほど進め方として、住民の皆さんのワークショップとそれから委員会との間でキャッチボールをしていきますっていうような話がありました。今拝見しているのは職員の皆さんがお作りになった理念、コンセプトなんですけれども、委員会と住民の皆さんとの間でキャッチボールをしながら、それを見ながら職員の皆さんは段々コンセプト整えて行きます、構想を整えていきますっていうような流れをイメージしていればよろしいんですか、というのがまず一つです。

（依田館長）

部長からも話があったように、形があって市民の皆さんに見てもらってこの通りです、ご承知おきくださいというよりは、一緒に作っていくということが、この委員会の皆様に頂いた意見を元にしながら、ワークショップのような形で開くという流れになっていくのかなと思います。

（豊田副会長）

先ほど森田さんのお話もありましたけれども、どういう進め方をしていくのかについての意見というところも委員会に求められているのか、いやそれは我々で考えるのでいいですよっていうことなのか、その辺のところは確認させて頂いた方がいいのかなと思ったので。

（土屋部長）

今、森田さんの方から多分既成概念が市民の皆さん有りすぎて、そのまま下ろしていくと既成のつまらない図書館になっちゃうよというお話頂いていますので、出し方もこの委員の皆さんの方で、こういう出し方をした方がいいんじゃないかというのはやっぱり議論頂ければばありがたいと思います。

（豊田副会長）

多分私もそうですけど他の皆さんも色々何か物を作っていく時に、いろんな方からどういうふうに意見頂いていったらいいのっていう事については、それぞれ経験もおありだと思うのでその辺を何か出せるような場面があるといいかなということが一つ。もう一つは新図書館というふうに言われていますけれども、もちろん今この図書館を移転する、その図書館のことを指しているとは思うのですが、図書館ってやっぱり一つのシステムですのでいろんな地区館なり、分館なりといったものの存在は当然無視できないと思うのですけれども、それも合わせて多分考えていく、メインはこれであっても。というような事も必要なのかなとも思ったりするのですけれども、その辺はどうなのですかね。いやそこはいいよということなのか、そこのところももちろん必要に応じて出してくださいねみたいな、そこの確認をしておきたいなとも思ったのですが。

（土屋部長）

中央図書館は機能の中の一つでございますので、建て替えはあくまで建物だけですので、当然運営側としてどうやっていくのかというのを見ていかなくちゃいけない。やはりそれについてもこういうふうにやってもいいのではないかというご意見も頂きたいと思っております。

（豊田副会長）

わかりました。どうしても住民の皆さんの意見を出すといっても移転の話だから、こういう夢がかなうのかなみたいな話になっていきがちだと思うんですけども。その辺のところはやり取りをしながらも段々全体の事を考えていく必要があるという認識ということですね。

（植松会長）

他にはいかがでしょうか。どうぞ

（森田委員）

見つけるという言葉は大賛成です。私も大好きで色々なところで使っています。ただ見つけてくれるとか、行けば見つかるだろうみたいな人にすがるというかサービスとして受けるのではなくて、自分がそこに関わっていくような事をやっていかなければいけないので、そういう部分でちょっともう一度見直す事が必要なのかなと思いました。もう1個ですね、大きな話をします。最近私は図書館が大きくなり過ぎているんじゃないかという思いがあります。立派すぎるんじゃないか。それはどういうことかというと、一つの拠点を立派につくると他に力がかけられなくなり、特に佐久市は旧市町村が合併してるものですから、ここに作れば、当然遠くてなかなか行けないよ、という人が出てくると思うんですよ。最近僕考え方を変えつつありまして、図書館はOSだという考え方。たとえばスマートフォンって、OSがあって、その上でたくさんアプリが出来るわけですよね。要するに図書館は本を貸し出すという作法、基盤があ

る。選書していく基盤がある。これに対してその基盤を使って何をするっていうアプリケーションを考える、という考え方でいくとこの中央図書館はOSをしっかりと作り、そのOSの使い方の例示というか、模範的なアプリケーション、それを各地域、地区ごとに真似していいというOSを配布する。わかりますか。ちょっと突飛かもしれませんが。例えば望月だったら望月らしいアプリケーションを作る。やっぱり駅前の必要なアプリケーションと望月の必要なアプリケーションは違ってくると思うんですね。そういうふうに一点施設をガチッと作るという考え方じゃない（各地区のひとたちがそこに相応しいブランチをつくれるようにしていく）方が、もしかしたらいいんじゃないかなと最近思って動いています。かなり大きな話になっちゃうんですけど、建物をどう建てるかとかそういう話じゃないんです。どうやってLibraryの思想というもの、本をどう使う、本は読み物だし何かを伝えるんだけど、その本の使い道ってもっとあると思うんですね。人を集めるためにどう使うかとか色々なことがあると思うんで、そういうことをここで取り組んでいく。非常に佐久市広域ですから、でかいですから。それが佐久市らしいかなと思うんです。

（植松会長）

どうでしょうか、他に。今のお話でいうと図書館という場所があって、ここにある1～6ぐらいのアプリケーションがその中で動いていくというイメージでいいんですかね。

（森田委員）

そうですね。これもアプリケーションと見ればそうですね。人と出会うためのアプリ。そこには本というものが基盤としてあるわけです。

（植松会長）

例えば移住者の立場として次の移住者をお誘いする時に、うまいキャッチフレーズやうまいアプリケーションがあると次の人を呼びやすいんだけどっていう意味からすると、例えば7番目に何か加えた方がいいのか、この6番までの中で例えば5のところでちょっとこういう事が加われば次の移住者を誘う時にやりやすいんだけどとか、あれば考えて頂くという事だと思う。

（森委員）

今の森田さんの話の流れに沿いながらなんですけれど、今立てて頂いている事項はすんなり入ってくるんですけど、比較的利用者の方たち、住民の方は受動的ですね。そのサービスを享受することが出来るのは魅力的だけれども、やっぱり享受する側なんだなって感じがしたんです。そこで「一緒に作る」みたいな観点があるといいんじゃないかと思います。例えば2の「佐久市の歴史文化と出会える場」も、誰かが用意してくれたその資料を使うことが出来る、知ることが出来るだけではなくて、それを使って自分たちが新しい未来の佐久市に向かって作り出すんだ、そういう機能が実は図書館にあるんじゃないか、それはアプリケーションの一つになるかもしれません。

（森田委員）

編集機能があります。

（森委員）

「人と人が出会える場」も、出会ってそこで何かを生み出すみたいなところに繋がるんじゃないかと考えると、作る観点、何かが生み出される場というような要素が柱になってくると有機的になってくる気がしました。それが一点。あとは佐久らしさ、佐久の郷土資料をどういうふうに扱っていくのかというところで、各地区の郷土資料、貴重な資料、一点物の資料を各図書館でこれからも維持管理し活用していくのがいいのか、或いは、収蔵スペースをしっかり中央館に設けてそこに集約して、デジタル化したものをいつでもどこからでも誰でもアクセス出来るようにしていくという姿を目指すのか、作るという観点からも関連して重要になってきます。本当は、各地に各地の文化がそのまま身近に残ってるのがいいと思うんです。あまりにも集約しちゃって手の届かないところ行ってしまうのはどうなんだろうかという面があります。一方で、管理的な合理性とのせめぎ合いがあると思うんです。各館の皆さんと一緒に話していって、残すとすればその地にある事による意義、住民とどんなことが起こるのか、起こり得るのかも含めて考えられるといいのかな。ここの建物だけを考えるんじゃない、各館を含めた全体の機能面のこととして、とても重要だと思いました。

（植松会長）

他にはいかがでしょうか、どうぞ。

（柳澤委員）

2点ほどあります。情報、情報という言葉がたくさんある。今情報ってスマホがあれば正直手に入るので、あんまりわざわざここにきて情報取りに来ようとするかなって正直思います。東京から来たんですけれど、東京と地方の格差、情報格差と、昔言われたんですけど今はほとんど情報格差ってないと思って。スマホやパソコンから情報は得られる。では何が格差かという時に、実践して、自分を主語にして実践していくっていうところで受動的になっちゃうと、結果若い人たちが住めていけなくなるところが今地域の課題なのかなって思ってます。情報の使い方とか、情報を使って自分で何ができるか、というところまでそういうワクワクしながら何かチャレンジしていけるような機能が一本の柱としてあるといいのかなと思いました。今ワークテラス佐久を運営していてよく思うのは、今いろんなコワーキングスペースがいろんな所に出来ています。国からいっぱい補助金が出て、リモートワーク推進して、お金があると絶対箱を作るんですけど。結局何が大事かというと、そこにいる人、運営してる人が、人を繋いだり実践することを応援したりしないと結局箱もので終わり、地域は何も変わっていないという、ハードはもちろん大事その中の人が変われるか、変わっていきたいか。職員の皆さん自身がどういうふうに自分がどう変わっていきたいのかっていうのがすごい大事でその辺を今後ぜひ話し合って頂いて、私たちに提示していただけたらシンクロできるのかなと思いました。

（植松会長）

ちょっと図書館協会的な立場で申し上げると、確かにSNSの社会になって誰もがカメラマンであったり誰もがレポーターであるという状況ができて、情報っていうのはすごくいっぱい世の中出回っていてみんな手軽に入手できるという事なんですが、逆に言うと、トランプさんみたいに自分の読みたくない

ものは読まないっていう人たちがたくさん増えているとか、あるいは意図的に、あるいはフェイクの情報流していく、それを本当だと思い込むという人たちが増えているというのがある。図書館っていうのはやっぱり正しい情報を提供する場だっていう基本的な部分がある、それは絶対守らなきゃならない。それから中にはこういう情報は与えたくないっていう、例えばプーチンなんか今8割ぐらい支持者が国内にいるわけですが、結局情報をコントロールしてるからそういう支持者がいるわけですよね。そういう自分とは反対の意見っていうふうなものもどんどん図書館で提供していく。例えば原子力発電所について賛成の人と反対の人がいて、賛成の本と反対の本がある時に、賛成の本と反対の本の両方ちゃんときちっと揃えて両方読んでください。あなたは原子力発電所についてどう考えるかっていうのを考えてもらうのは図書館の立場だということ。これを外すとSNSの社会になってしまうという、これは申し上げておきたい。

（森田委員）

重要な点だと思います。そのためにやっぱり多様な人が来られないとそういう意見が聞けないので、偏った人しか来ない図書館ではいけないんで、どのように多様な人が来るか、来られるか、かなりしつこくというかやらないと。

（植松会長）

図書館でそれぞれの利用者が成長していけるような図書館というのがいいんじゃないか。

（豊田副会長）

育てるの中で次世代を担う人づくり、活力ある人づくりを支援する場となりますが、ちょっと大事なことなんですけれども。さっきの受動的になってしまう問題がありましたけれども、その受動的にさせられてしまっている人っていうのはいっぱいいるわけですね。それは地域によって違うんですけども、例えば外国人が住んでいれば多くの場合外国人の労働者、障害者はそうなりがちだよねとか、あるいはあまり人が出て行けないような雪の日、そういう環境があれば高齢の人とか運転免許持ってないとか、新住民はどうもなかなかこの社会に入りにくいんだよねみたいな話もある。そういったいわゆる社会的包摂って言葉、よく使われますけれども、その辺のところを一つのベースとして考えた上で、でもその中で例えば中央図書館はあえて次世代を重視していくんですよ、その辺の大きいくくりの中でバランスを考えて、でも全体としては情報や資料でエンパワーメントしていくんだよ、力をつけていくんだよというような観点があるといいのかなと思います。またちょっと枠組みの話になっちゃうんですけれども、先程森田さん公民館の話をおっしゃったんですけれども、社会教育施設として、コミュニティ施設のことかもしれないけれども、公民館は公民館でその人が出会う、そこで繋がっていくっていうことを当然課題にしているわけです。それに対して図書館はどういう意味で繋いでいくんですかっていうようなこと、何をもって繋いでいくんですかっていうのが重要になってくると思います。その時に公民館はどういう課題になっているのか、この地域の中でというような事も本当は考えないと。もちろん私はその答えは全然持ってなくて、教育委員会の皆様がそれを持ってると思うんです。その辺のところが結構大事で、ついこの間全然別の地域で公民館長から図書館長になった方と話をする機会があったんです。

公民館の今の課題って繋がりを作るんだけど新しい人は入りにくいんだよねっていう話。それに対して図書館は繋がり繋がり言うけど、新しい人来るけど、そこで全然繋がり出来ない続かないよねっていう、そういうような話が出ていて、その両方は考え合わせる事で一つの方向性って出てくるんじゃないですかね。そこ考えないとなんか掛け声だけに終わっちゃうという話をしていたんです。それから今日小木田さんいらっしゃいますけれども、出版の事ってすごく大事だと思っていて、長野県内の図書館は割と出版をテーマに扱っているところあると思うんですが、やっぱり出版産業とどういうふうに繋がっていくのかとか、図書館自体が住民が発信をしていくための手段として出版を応援するっていう事は出来ないのか。これ電子化の時代ですから実はどんどん可能性高くなってると思うし、あえて紙で出していくそういったこともやっていく事として双方の中では考えていく必要はあるのかな。もちろん1人1台というか数台、パソコンないしスマホ持ってる時代ですから、ある意味では一人一人がみんな自分のデジタルアーカイブ作っちゃってる時代なんで、それをどう繋げていくのかも課題になり得るのかなと思っています。あと柳澤さんがお仕事としてやっておられているウェブサイト見させて頂いて思ったんですけれども、図書館で働く人たちの働き方っていうのはどうしてくのか、これ大事な一つでやっぱりもう既に非正規率7割8割いっちゃってるし、また図書館で何かつくるとか、あるいは協力するとか、ボランティアというと狭くなっちゃうんですけれども、そういう人たち図書館で活動しているわけですね。そこでもしかすると何か生業に繋がるような事があるかもしれないし、そういうことも考えていくと色々と可能性が広がるなと。今風呂敷思い切り広げましたけれど、そんな事を皆さんの話を聞きながら思ったところです。

（植松会長）

北欧なんかではパートナーと言って図書館で自分の企画したプログラムイベントをやる人がいる。図書館員だけでイベント考えてると大変なんで、パートナー契約するというのもやっています。実はもう予定していた時間を過ぎておりまして。次いつ開催するかなんですが。

（高橋事務長）

今後の進め方につきましては、本日資料の2-2として出させて頂きました6つの視点でハード面、ソフト面と四角い枠に書かせて頂いたんですが、それぞれ皆さんにはご意見やお考えをできれば事前に頂いて資料の中に全てまとめたものを次の会議で示して、そこで再度議論頂きたいと、このように考えてはいます。

（植松会長）

例えば6本目はもっとこういう表現にした方がいいとかいうのはあるかもしれないし、7本目を立てた方がいいかもしれないっていうのもある。なので、全体としてもう1回1から6について割と好きに喋るっていう場を設けた方がいいかと思いますが。ちょっと許されるのであれば、多分そういったことでどうでしょうか？

（土屋部長）

そういったことで、お願いできればと思います。

（植松会長）
　例えば年度末ってありますよね議会とか。
（森委員）
　今日リアルに集まれたので、次回以降オンラインが選択肢に入ってくると、かなり融通が利きやすいかなっていう感じはします。
（植松会長）
　では2月3月の間で1回やって、全体的な1から6のもう少し肉付けして、ハード面ソフト面を。

≪・・・日程調整中・・・≫

（植松会長）
　2月27日（月）を第2回目の候補として、このくらいの時間が皆さん集まりやすい。もしご都合の悪い方は、オンラインでご参加ください。
（篠原委員）
　この検討委員会は、基本計画まで含めているということですよね。だいたい何年くらいかかるのでしょうか。
（土屋部長）
　通常ですと行政で計画まで行くのは大体1年ぐらいを目安にしていますが、ただそれがある程度先ほど話にもありましたキャッチボールをやっていきますので、長くても1年半ぐらい、できれば1年間ぐらいでまとめていければと思います。
（植松会長）
　皆様には、資料2-2の4ページから6ページのところで今6本の柱を事務局としてお考えで、そこで例えばたくさんの情報であれば、そして例えばこういうアプリが流れるとネットがこういう取り組みが行われるとたくさんの情報があるとか、建物としてはこんなふうでいんなというのを思いつく範囲でいただいて、フォーマットとして送っていただいてここに好きなことを書き込んでいただければ。そういうことでまず最初はお考えをどんどん出していただいて、できるだけ、尖った意見をいただくのが面白いと思います。それぞれのお立場で出していただき、1週間か10日ぐらい前までにということでお願いします。それでは事務局にお返しします。

（高橋事務長）
　植松会長ありがとうございました。それでは最後に教育長の方から一言がございます。
（吉岡教育長）
　委員の皆様、長時間本当にありがとうございました。私の感想を一言で言えば本当に中身の濃い充実した会議だったなと本当につくづく思いました。いろんな観点からのご意見を本当にお聞かせい

ただいて、指摘も含め、思い足らない点もとてもあって、半分ワクワクもしたけど半分やっぱりすごい大変だねそんな実感をしました。それで先ほど今もう会長さんにまとめていただきましたけれども、資料のやり方ですけども最初、会議の持ち方で言いましたけれどももう一つ付け加えると、こういう会議を充実するには、例えば今日の会議発言をこちらの方で大体まとめたのをお送りして、こういう趣旨で間違いなかったですかとそれを確認してさらにそこに書いていただいたものを集めて、それを一覧表にしてあらかじめ配って会議をやる、とてもこれ大変ですけども先ほど言いました、かなりの会議で、多分学校関係の会議では相当やっています。今の校長さん方はとても大変。校長会の度に全部事前にそれ意見を求められて、それで事前にその場でみんな流されて、そうするとここの学校で、あるいはこの委員さんが言っているところこんなことでいいですかみたいなところから、充実していきます。最後にそのようなことをお願いしようと思ったら、もう皆さん方がそういう形でやろうっていうあのそういうふうにしておくと、緊急的なオンラインのときにすごく役に立つのですよ。それが全くないと、さあ困った配ったの見てくださいとか。見ていて90分のうちの80分ぐらい。それで何か質問ありませんか。どういうつもりなのかなと結構ありますんで。そんなことを考えますと、今日は本当に充実した会議、何回かこうやってって持てれば会議の持ち方から始まって、そういうこともいろいろ私どもには、教えていただくことが本当多くあります今後ともよろしくお願いいたします。

7　閉会